

幼児と音楽を聴いて

兎 束 淑 美

この度児童文化研究会の発表者として音楽の方では2テーマのうち1テーマについては、本学卒業生の中から県外で活躍されている先生にお願いすることになりました。そこで急ではありましたが、上越の米田先生にお願い致しました。先生には夏休みを数日に控えての時でしたので、特別園児と研究する時間が持てず3才児を3年間受持った経験を通して音楽の方面から発表して頂きました。

初めての先生と入園当時の園児の心の動き、そこから始まる園生活の中で関って来る音楽について、順を追って発表して頂きました。その中で歌からリズム打ちに入る方法は、非常に大事な過程であると思いました。いかにもソルフェージュをすると言うのではなく、自然に楽しくリズムに入っていく、それによって子供達が同じ曲でも新鮮さを感じるのは、良い方法と思います。

又合奏の部分では、標題のある曲を選び練習に入って見るがうまくゆかず、先生がその曲の標題を基にして、お話を作り聴かせたり、劇遊びをすることによって、子供を喜ばせ曲のイメージを膨まらせておいて、改めて練習に入り完成させて行く過程は、本当に素晴らしいと思いました。外国では幼児の音楽教育ではもちろんのこと、小学校教育に於ても経験を豊富にさせることによって次の段階に入る話を聴きます。実際に体を通して教えることが徹底している様です。それは或る場合、大人の目から見るとばかばかしく思われる時もあります。しかし子供を楽しませ乍ら創造性を育てる大変重要な課題を持っている訳です。

わらべ唄についてふれていられますが米田先生の言われます様に、私達がわらべ唄をうたうと自然に心が和みます。のどかな様子も連想します。しかし現代の子供

が昔の様子を想像することは、家の人々の話や絵本やテレビの昔話を通してだけではいでしょうか。所が或る例ですが、村祭りのタイコを教えて欲しいと頼まれた先生が、タイコのリズムを楽譜に書き取ってそれを小学生に教えた所、音楽の練習も何もしていない子供達が譜面も見ずに一度で覚えてしまったと言うのです。その先生もびっくりされていましたが、その話から日本人の体の中を流れる血の中に、お囃子やわらべ唄のリズムや心があることを強く感じました。そして同じ様な子を見たことがあります。学校の音楽のきれいな子供が八木節で樽を精一杯打つ姿でした。現代の様なマスコミの発達している中で、子供達は色々なリズムや音楽に触れる機会の多い毎日です。わらべ唄の動きは古いものばかりでなく、米田先生のように新しい曲を作る方向が生れて来ます。私達はわらべ唄に限らず、子供達に豊富な音楽経験をさせてやりたいと思いました。それは子供にとって世界の音楽の童話とも言えるのです。

(上田女子短期大学講師)